『ぼのぼの』のデザイン

最新刊（7月14日発売）

オリジナル 24
Originally
July 2023

『ぼのぼの』のデザイン 1
オルガンコンサートのデザイン 4
思い出のクリフォード 6
日日読書 6
メモランダム・本のデザイン 7
昭和残照 8
続・ぼくの映画館は家から5分 9
はれのち句もり 10
N'S COLUMN 11
魚の環世界 12

「ぼのぼの」という漫画を37年間連載している。昨年描いた第424話では、年老いた羊がぼのぼのたちの森を通るという話を描いた。なんのためにこの森を通るのかわからないままに、ぼのぼのや森の動物たちは、その羊を見に集まる。実はその羊は病気で、毎年その森に薬草を食べに来るのだが、事情を知っている大人の動物は、今年も無事に来られるかどうか心配しながら羊を待っている。そして羊が姿を現し、みんなが隠れて見ている前をヨロヨロと歩き過ぎたあと、森を守るヒグマの大将が、なぜみんなで羊を見に集まるのかについて、「みんなでいっしょに暮らすには、みんないっしょに見るものが必要なのさ」と言う。これはコロナで分断され、孤立化してしまった個人や家庭や社会へのアナロジーではあった。

朝日新聞　2023年3月29日
いがらしみきお
「神様のない宗教から12年」より抜粋

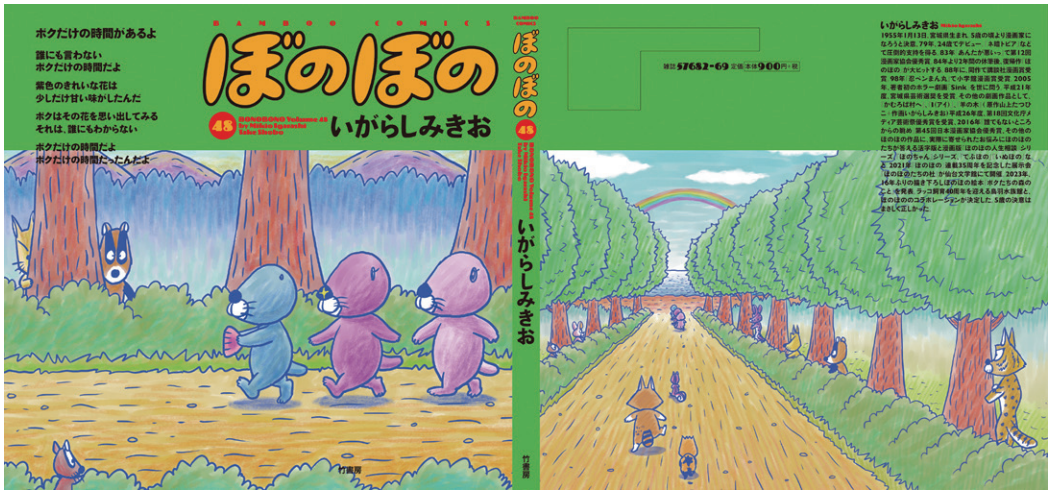
『ぼのぼの』48巻

最新刊は、鳥羽水族館で飼育されているキラちゃんとメイちゃんが登場します。ラッコが3人並ぶカバー絵がかわいいです。この頁の下、いがらしみきおさんが朝日新聞に書いておられる年老いた「ヒツジさん」が出てくるのは、この巻の最後のおはなしです。（赤波江）

ヒツジさん

自分が死ぬのを忘れてはいけません。誰かの死はそれを思い出させてくれます。

（「今回登場するキャラクター」より）



『ぼのぼの』カバー
1巻（1987年3月刊）～17巻（1999年7月刊）

昨年5月の本誌10号に35～47巻のカバーを載せました。
今回は1～17巻を紹介します。

オルガンコンサートのデザイン

チラシ表面

パイプオルガンは大きくわけて三種あります。教会やホールに設置される「大オルガン」。小型の箱で持ち運びできる「ポジティフ・オルガン」（ラテン語のpositum＝置かれる／フランス語のposer＝置く、より）。肩からかけたり膝に置いて演奏する、移動しながらも弾ける「ポルタティフ・オルガン」。ポジティフ・オルガンの組み立てから調律までを、オルガン製作者の解説をききながら楽しめるめずらしいコンサートです。楽しそうな雰囲気が出るように親しみやすい書体と明るい色を選びました。（赤波江）

プログラム　B5／4頁

チラシ裏面

メモランダム・本のデザイン 16

日下潤一

「室内」その1

（1967年7月号／工作社）

シンプルな誌名。室内はインテリアのことだ。「室内」の絵の表紙（早坂信。葉山のマリーナ）。文字はレタリング。活字の初号や写植の最大級を拡大すると、文字のエッジのガタツキ、レンズによる歪み、シャープネスの不足が目立つ。大きな文字は描く。表紙デザインは渡辺力（81年1月号から五十嵐威陽）。67年、最初に勤めたデザイン事務所にはレタリングのスペシャリストがおり、新聞広告の見出しなどを描いていた。

「室内」を読んでいたのは、80年代後半から90年代。表紙の写真は藤塚光政（1979年から）。前回の安藤鶴夫は、発行人で編集長の山本夏彦と親しい常連の寄稿者。

1955年に山本夏彦が「木工界」を創刊、61年4月号から「室内」に。表紙には「木工界　改題室内」。この改題付きは9月号にもある。「木工界」の最後の3月号に山本が〈「木工界」は、次号から、名を「室内」と改める。（略）木工といえば、人は家具だけをさすと思いがちである。ところが「木工界」はそれだけの雑誌ではない。建具も建築もふくむ。（略）新しい読者をさらに得るには、改題するに如くはないと、思い立ったのは、三年前のことである。（略）「青い鳥」の作者メーテルリンクに、「アンテリウール」（内部）と題する脚本があって、室内と訳されていたと承知する。それに因んでかりに名付けたのである。〉と書いている。

有名な写真コラムについて〈なぜコラムって言ったかっていうと、戦前随筆といってたものを戦後皆々エッセイって言い出した。エッセイはモンテーニュから出た言葉で、それには根底に思想とまではいかなくても「考え」がなければなりません。何の考えもない随筆をエッセイというのは僭称です。飾ってエッセイといったのでしょうが、我も我もエッセイストになった。（略）だからエッセイって言わない。言いたくない。〉〈コラムにも考えがなくちゃいけない。コラムだって烏滸がましいけれど、エッセイよりはその頃手あかにまみれてなかったんでまあ許してもらった。〉〈写真とくっつけて、一ページ、時として二ページ。類のないものができるんじゃないかと思って始めた。〉（『室内』の40年／山本夏彦／文藝春秋／1997年）と言う。

この号の写真コラムは歩道橋だ。「歩道橋のデザインの悪さ」「本来よくない施設。力のない人間が平らなところを歩き、力のある車が坂を登るのがものの道理」「美しい歩道橋を、渡ってみたくなる歩道橋をつくること」と泉真也が書く。今や歩道橋は路上で無惨な姿を晒している。かわりにわれわれは地下街や駅の階段を登ったり降りたりする。

もり・えいじろう　1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎 著）、絵本『おとうさんのうまれた うみべのまちへ』など。

森英二郎
思い出のクリフォード ⑧

高校2年の頃、4歳上の兄の友達が持って来たレコードを、これ、カッコエエで、と言って我が家のステレオでかけていた。聞こえてきたのは不思議な声で独特の節回しの女性ボーカルでなんかカッコよかった。それはニーナ・シモンの「フォービドゥン・フルーツ」というアルバムでした。それから彼女のファンになり70年代くらいまではよく聞いていました。

それから35年くらい経ったある日、夜中に仕事をしていると、ラジオから♫エブリワンズ　ゴーン　トゥ　ザ　ムーンと歌うニーナ・シモンの声が聞こえてきた。次の日すぐにこの歌の入ったCDを買いに行きました。

ニーナ・シモン Nina Simone
1933-2003

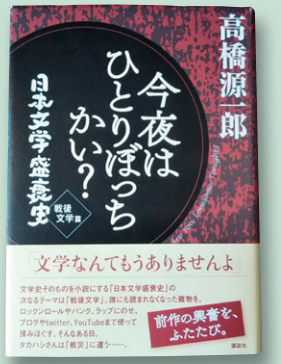
日日読書
大西良貴 21

おおにし・よしたか　1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

London Books
616-8366　京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

最近この人の本ばかり読んでいる。本作は文学史そのものを小説にした『日本文学盛衰史』の「戦後文学篇」。前作は漱石、啄木、花袋らが登場し、この作家ならではの超絶技巧はあれどいちおう小説らしい小説になっていたけど、この「戦後文学篇」は、登場人物は配置されず、作者自身を中心にした語りで、いろんな作品が引用されるスタイル。自分が生きて来た時代を扱うゆえ、より自分に引き寄せて語ることになったということか。

氏は誰より文学が好きだからこそ、文学につきまといがちな古臭いイメージ、エラソーなイメージには敏感で、それを払拭しようとする。そのために現代の風俗を持ってくるのが得意。本作ではロックやラップ、twitterなど。あるいは、内田裕也の発言や、映画『SR サイタマノラッパー』に、かつての文学に似た何かを見出す。できるだけ低い姿勢、ドヤらない言葉で、文学を掬い取ろうとする手つきがスリリング。



高橋源一郎
『今夜はひとりぼっちかい？
日本文学盛衰史 戦後文学篇』
講談社／2018年

関川夏央 昭和残照 十六

引退するのも大変だ

羽田空港安全検査場で元プロ野球投手の村田兆治が逮捕されたと聞いて驚いたのは、2022年9月だった。

スマホを手にしたままゲートを通過しようとして警報を何度も鳴らした。制止してスマホを別に通すよう要請した女性係員の胸を突いた。その後村田は反省の意を表して拘留を解かれたが、ちょっと理解しにくいいきさつだった。

村田には安全検査員が何をもとめているのか理解できず、行く手を不当にさえぎられたと思ったのだろう。瞬間的な放心、いわゆる「ウロ」がきた状態に陥ったとしても、72歳ならそれほど不思議でもない。

村田兆治は1968年のドラフト1位、18歳で東京オリオンズ（のち千葉ロッテ・マリーンズ）に入団した。71年に12勝をあげて主力投手となり、フォークボールを覚えた76年には21勝した。しかし82年に右肘を痛め、翌83年、渡米して当時はタブー視されていたトミー・ジョン手術を受けた。

85年、35歳で復帰すると開幕11連勝、年間17勝5敗の成績を残した。中6日、日曜日ごとに登板して勝ちを重ねたので「サンデー兆治」と呼ばれた。89年に通算200勝、コーチ兼任となった90年にも10勝したが、40歳のこの年限りで引退した。

生涯215勝177敗、33セーブ。604試合に登板して先発433、完投184、完封36。色紙に「人生先発完投」と書いた。村田のタイトルは、最多勝1回、最多奪三振4回、最高防御率3回、最多セーブ1回。落差の大きなフォークが主武器だったので、ワイルドピッチも史上最多だった。

村田は引退後も鍛錬をつづけていたらしく、2007年、57歳のとき時速135キロの球を投げ、2013年、63歳でもやっぱり135キロを投げたという。

それより以前の1994年、スポーツライターの小林信也は、NHKテレビの番組で44歳の村田の投げる球を受けたことがあった。「軽くキャッチボールをした後、村田が私に座れと言った。この相手なら大丈夫と踏んだのだろう。かなり本気の速球を私のミットに投げ込んできた。140キロはないと思うが、肝を冷やすには十分威力のあるボールだった。すると村田は、フォークの仕草をした」（小林信也『アスリート列伝』）

高校で野球部だった小林は、「ちょっとうれしかった」。背広姿の村田が、脚をあげて左のお尻をこちらに向けた。「バリバリのマサカリ投法」だった。

「目の前でフォークボールがフワッと消えた時、私の意識は一瞬、どこかに飛んでいた」

小林はなんとかミットに当てて前にはじいたが、マスクもプロテクターもない。これは無謀だ。しかし村田は、すでに次の投球動作に入っている。またフォーク、またワンバウンドだった。

小林は村田に叫んだ。「素人相手にワンバウンドはやめてください！」

村田が叫び返した。「フォークというのはそういうボールだ！」

手を抜くことが村田にはできないのだ、と小林は思った。

羽田の事件から2ヵ月後の2022年11月11日、世田谷区成城学園町の村田の自宅から火が出た。間もなく消し止められたが、村田は2階リビングの床に座り、指にタバコをはさんだ状態で発見された。焼死ではなく一酸化炭素中毒だった。その家に妻子は住んでおらず、一人暮らしだった。私と同年同月生まれの村田が73歳になる半月前だった。

せきかわ・なつお　1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』（双葉社／第7回講談社ノンフィクション賞）『「坊っちゃん」の時代』（双葉社／谷ロジローと共作・第2回手塚治虫文化賞）、近著に『人間晩年図鑑』シリーズ（岩波書店）。

イラストレーション……南伸坊

続 ぼくの映画館は家から5分 24

伊野孝行

日本人は無宗教だと言われるが、ではフランス人のどれだけがキリスト教を信じているだろうか。世界は神によって造られ、最後の審判が必ず待っている……とここまで信じなきゃ宗教とは言えない。ただ隣人愛を示すだけなら道徳と変わりはない。

ノートルダム大聖堂火災の一部始終を見ることができる映画。いわば神視点。徹底的に調べ上げ、一般人が撮影した映像も集め、巨大なセットを建てて燃やした。

噴煙がパリの空高く立ちのぼる。出勤初日がこの火災だった若い男女の消防士。野次馬で道は渋滞。隊員たちが重装備で登る狭い大聖堂の階段。屋根の鉛が溶け出し雨のように降り注ぐ。最重要聖遺物の「いばらの冠」（キリストが被っていたとされる）救出は困難を極める。再現度98％と謳う本作を観ている間、何度も「これは作られた映画なんだ」と自分に言い聞かせた。神視点で見ておられた神様も手に汗握ったことだろう。

大聖堂も映画も、すべて人間が作ったものだ。きっと神様だって。神はいなくとも、消防隊員は職務を全うし、極限状態で相手を信頼し、自分を信じなければ事は成せない。混沌たる世界に形と意味を与え、今日まではびこった人間の歴史を灰にしてなるものか。マリア像が涙を流しているように見えるカットが白々しく感じるほど、人間への礼賛にあふれているのだ。

いの・たかゆき　1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回講談社出版文化賞、第53回高橋五山賞。著書に『画家の肖像』『となりの一休さん』などがある。テレビアニメに「オトナの一休さん」。最新刊は南伸坊さんとの対談本『いい絵だな』。

風呂吹や長き舌はく法師ばら　星野麦人

はれのち句もり 十六 高山れおな

「ばら」は複数を表す接尾語。何人もの僧侶が参列した比較的大きな法要の後の、お斎の場面だろうか。熱々の風呂吹き大根を吹きさまし、ハフハフと息をつきながらの食事風景である。

緋衣紫衣に川風なびく施餓鬼哉

読みは、ヒエシエニ・カワカゼナビク・セガキカナ。河畔で営まれる施餓鬼会のさまを、僧衣の色に焦点を当てて詠んだ。両句とも、句集『草笛』のうち明治三十八年（一九〇五）の句からなる「春水抄」の章に見える。いずれもきびきびした語調の快い、印象鮮明な句だ。同書は昭和七年（一九三二）の刊だが、麦人は同じ年にもう一冊の句集『紫陽花』も出している。相次ぐ出版にはこの年、主宰する俳誌「木太刀（きだち）」が、前身の「卯杖」創刊から数えて三十年の節目を迎えたことを記念する意味があったに違いない。また、同年にはさらに『木太刀俳句選』も上梓された。

高浜虚子による「花鳥諷詠」の提唱に明け、水原秋桜子の独立、新興俳句運動の勃興と続く昭和一桁代は、近代俳句史における充実期と言ってよい。昭和七～八年には改造社が明治以来の創作と研究を集大成する観のある『俳句講座』全十冊を刊行し、同九年にはやはり改造社から初の俳句総合誌「俳句研究」が創刊されている。木太刀社もまた、先の三冊以外にも、年刊句集を逐次世に問うなど、俳句界の活況に伍していた。現に『俳句講座』第八巻の「現俳壇展望」では「ホトトギス」をはじめとする主要十二結社の一角を占め、「木太刀の人々とその主張」という一文が掲げられている（執筆は麦人）。

だが、表面的な華やぎとは裏腹に、右の文中に紹介される結社メンバーの句や麦人の二句集を読む時いささか暗澹たる思いが沸き立つのを抑え難い。なぜか。作品がどうしようもなく古いのだ。ちなみに『草笛』は昭和四～七年、『紫陽花』は大正十二～昭和七年の句を収め、さらに前者は明治三十八年、後者は同三十九年の旧稿を加える。拙文の冒頭で、あえて明治三十八年の句を引いたのは、大正末から昭和初年にかけての本体の部分に感心しなかったためだ。正岡子規や尾崎紅葉の薫陶の名残りゆえか、まだ二十代の客気ゆえか、明治期の句には認められた緊張感が、壮年期の作からは失われてしまっている。一方で、句集の序文や『俳句講座』の文章に感じられるのは、麦人の人柄の良さだ。嗚呼。

東風寒う鷺の蓑毛を渡りけり
揚ぐるより早く靡いて幟哉
夏蝶や埃の中を薬売
ぼろ市や弥次が股引喜太が足袋

これらもまた『草笛』所収の明治三十八年の作であり、明治の俳句として恥ずかしくない水準を示す。とはいえこれで、秋桜子や山口誓子のような新時代の俊秀たちに対抗するのは難しい。麦人の力量の限界はすなわち、紅葉や秋声会が俳句史的に存在を稀薄にすることを不可避にした条件だったのである。

イラストレーション……霜田あゆ美

たかやま・れおな　1968年、茨城県生まれ。俳人。「豈」「翻車魚」同人、朝日俳壇選者。句集に『ウルトラ』『荒東雑詩』『俳諧曾我』『冬の旅、夏の夢』、評論に『切字と切れ』『尾崎紅葉の百句』。

N'S COLUMN 24

西岡琢也 2時間ドラマの禍根

あれはいつからだろう、神社の鳥居で出入りに二度、必ず一礼する参拝客が増えたのは。ついでに言っとくと、寺で柏手を打つ人も見かける。あれは賽銭箱で条件反射するのかね。

突然テレビの話になるが、2時間ドラマが激減した。業界では〈2H（ニエフチ）〉と呼ぶ。ドラマは金がかかる、バラエティーは安上がり。それが一番の理由でしょう。

かつて各局連日競って放送した。かく言う僕も稼がせてもらった。人から聞いた話だが、某週刊誌の2H特集の脚本家ベストテン（その年何本書いたか）で、ベテラン峯尾基三氏と並んで僕が栄光の第一位に輝いたとか。02年か03年頃の話です、確か。

でも正直2Hは苦手だった。おまけに下手、謙遜でなく。あれはドラマが書けない。何故か？　フォーマットが決まっていて、犯人探しが絶対条件。今は〈ネタバレ注意〉が全盛だし、推理小説も誰が犯人かのハラハラドキドキを楽しむ。ヒッチコックが『サイコ』（60）公開時、映画館へ途中入場お断りの要請をしたらヒットしたとの逸話もある。

僕は犯人なんか誰だっていい。興味はドラマ。ドラマを書きたい。だから直ぐに2Hと相性が悪いと気が付いた。でも稼がにゃならん。で、量産した。

2Hの主人公は刑事か探偵。推理好きの主婦なんてバリエーションは様々。冒頭に殺人事件があり捜査開始。必ずダミー犯人（ギャラの安い役者）がいて疑われるが、殺される。そこがお話の真ん中あたり。九時スタートだと十時頃。業界用語で〈十時またぎ〉と言う。他局の番組の替わり目にチャンネルを変えさせないための方策なり。いじましいねぇ（九時前に始める〈フライング・スタート〉というのもある）。

その後色々あって主人公は真犯人（〈ゲスト主役〉と称しギャラは高い。勿論主役より安い）を追いつめ、証拠を突きつけ自白させる。これぞご存じ松本清張『ゼロの焦点』由来の、〈奥能登ヤセの断崖愁嘆の場〉であります。

しかし本来一番のドラマは主人公でなく、殺人を冒す犯人にあるはずだ。殺したいと思うのと実際殺すのとは大違い。ルビコンの河を渡るまでがドラマですよ。2Hでは犯人の動機や手口を、最後にダイジェストする。視聴者に短時間で理解させるため、複雑なはずの犯人の葛藤は単純化される。肝腎のドラマは犯人探しの奥に隠されてしまう。

でも視聴者の興味は犯人探しにしかない。視聴率の折れ線グラフを見れば一目瞭然だ。

今は一分刻みに視聴率が出るが、2Hのグラフには三つの〈山〉が出来る。一つ目は最初の殺人、二つ目は〈十時またぎ〉、最後の一番大きな〈山〉は真相解明のクライマックスで、それが済むとグラフは谷底に向かって急激に落ちていきます、ハイ。

しかし2Hの最大の問題は、何と言っても主人公像にある。刑事や探偵、検察官や取締まり組織に属した制服組も多い。常に主人公に正義がある。悪い奴らは捕まえろ！　悪い奴は誰かって？「それは我々が決めます」と主人公たちは胸を張る。俺たちにはその権限があり、バックにどでかい組織があるんだから文句は言わせない。

2Hの長年の隆盛はテレビを通じて国民に、権威や組織に従順たれと刷り込んだ。それで神社の鳥居の出入りに二度、必ず一礼するようになったというのが僕の見立てだが、どうだろう。

にしおか・たくや　1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO〈刺青〉あり』『沈まぬ太陽』『はやぶさ～遥かなる帰還』、TVドラマ「京都迷宮案内」シリーズ、「返還交渉人」など。

Quistgaard（クイストゴー Jens Harald Quistgaard／デンマーク／1919−2008）によるDANSK社デンマーク製のチーク製品（トレイの上にチーズ用ボードとナイフのセット）です。

トレイには厚さ0.7cm×幅5.5cmの材を繋いだものが使われています。わずかに立ち上がった両端がとても持ちやすく、全体にすっきりと丸みを帯びた優しい印象です。以前の所有者はこのトレイをお皿としても使っていたようで、小さなキズがたくさん残っています。また、チーズ用ボードとナイフは細かな寄木づくり。レンガのように組み合わさった木目のパターンがチーク材の重厚さに動きを与え、印象的な模様となっています。ナイフの刃をボードに差し込むと一体化するので、持ち運びに便利です。

幼い頃から手先が器用で手工芸を好み、絵画や彫刻などの美術を学んだQuistgaardは、自ら制作もこなすデザイナーでした。ヴァイキングの文化や風俗から影響を受けたと思われる力強く美しいかたちに加え、機転の利いたつくりは、日常的に使うことでいっそう魅力を感じます。

デンマークのメーカーでは、1940年代から彼のデザインしたカトラリーを製造。1954年にはアメリカで創業したDANSK社のチーフデザイナーに就任し、生涯に渡って数多くのプロダクトを世に送り出しました。その数はなんと4000以上にも及ぶそうです。

トレイ=長さ51.5cm　幅25.5cm　高さ4cm
ボード=直径13cm　厚さ2.5cm
ナイフ=全長20.5cm　刃の幅2.2cm　刃の長さ10.7cm

魚の環世界 23

魚住寧子

タイトルレタリング……ヨコカク（岡澤慶秀）

ウンベルト　Umwelt Textiles & Objects
604-0962　京都市中京区夷川通
御幸町西入達磨町588-1

うおずみ・やすこ
1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

今月のあとがき

息子が蝉の抜け殻をほしがるので、毎朝近くの公園で収集しながら保育園へ。蝉は雨の日にしか孵化しないことや、土の中で７年間眠っていること、蝉の抜け殻を探すコツ、たった１週間で死んでしまうことを、こどもの頃に祖母から教わった。７年間も土の中って大変そう。神宮外苑の土の中で眠っている蝉の幼虫は、樹木が伐採されていることを知らない。次の夏はどこで鳴いたらいいのか。だんだん蝉の鳴かない街が増えていく気がする。誰もそんな心配なんてしないのかもしれない。（赤波江）

E.Mori

パンタが亡くなった。頭脳警察。日本語のロックを最初に生で聴いたのは、頭脳警察とはちみつぱい。二つのバンドを教えてくれたのは上田賢一。愛称キンタ、「春一番」の福岡風太らと70年代初期にコンサートやバンド活動。上田は2020年に他界。パイプオルガンのポジティフには驚いた。パイプの素材は鉛と錫の合金、15世紀のグーテンベルクの金属活字と同じ。会場でマチュー・ガルニエさんに質問したら頷く。活字はアンチモンという鉱物が加わる。パイプオルガンの金属は11世紀頃から。（日下）

オリジナル 24
Originally July 2023

2023年7月15日発行　〈ロゴデザイン〉ヨコカク　〈編集・デザイン〉赤波江春奈＋日下潤一　〈印刷・製本〉グラフィック　〈発行〉ビーグラフィックス
©B GRAPHIX 2023, Printed in Japan　【無断転載禁止】
◆Web＝bgraphix.com　◆Twitter & Instagram＝@bgx_book_design　◆日下潤一のブログ＝www.bgx.jp/blog/
「オリジナル」はBGXが毎月発行するペーパーです／90部／お問い合せは akabae@bgx.jp まで